

第3回公立大学法人秋田県立大学経営協議会
議事要旨

1 日時：平成18年12月25日(月)15:00～17:10

2 会場：秋田ビューホテル 5階「牡丹の間」

3 出席者

(委員)

種市委員、大島委員、渡邊委員、根岸委員

小林理事長、柚原副理事長、新潟理事、森理事、駒野理事、竹村理事

(監事)

倉田監事

(事務局)

菅野統括リーダー、佐藤統括リーダー、渡辺チームリーダー、鈴木チームリーダー、深井チームリーダー、須田チームリーダー、金チームリーダー、能美チームリーダー、阿部チームリーダー、智田チームリーダー、花方スタッフ、畠山職員

4 議事概要

定款の定めにより理事長を議長として会議を開催した。

(1) 定款に基づき経営協議会の議を経る必要のある事項について

1) 平成19年度秋田県予算に係る予算要求について

資料に基づき説明を行い、了承された。

2) プロパー職員の採用について

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

採用予定者は秋田県在住の方が。

県外に出ている県出身者の方もおり、それも含めると全員県内出身者である。

賃金は、県職員程度か、それとも他大学と同じレベルか。

簡単に言えば、県並の水準であるが、年齢的なものや前歴を見ながら額を決めて行くこととしている。更新可能だが、事務職員も任期3年を原則としている。職階ごとにレンジを決めているので、その範囲内で給与を決めていく。年俸制である。

現給保障ではなく、当人との合意の上で決めている。

3) 個人情報保護規程の制定について

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

科学技術館でPマーク(プライバシーマーク)を取得した。これを取るためには構成員全員に対して教育をしなければならない。どういう情報をどのように管理するかといった体系を事細かに明示する。このプライバシー保護関係の問題というのは、全員が十分に理解していなければならない。特にパソコンなどの管理や事務所の施錠などがきちんと体系化されていなければならない。それを全員が理解するために、1年に1回教育をしなければならないということになっている。

今、大学情報ネットワークポリシー、特にパソコン等のネットワークのポリシーを作り、
どういう情報ネットワークを保護維持していくか、安全性を保つかということを検討し
ている。これらは学生を含むので、本学一体、教員、事務職員、学生という形で、ひと
りひとりが研修を通じて身近に理解してもらうことが何よりも大事であり、できる限り
機会を設けて理解を深めるようにしていきたい。

誰が何のためにやるかということを教育しておかないといけない。我々の場合は、Pマ
ークを取るために、ということをした。そうするとPマークを取るというのはどうい
うことか、ということが出てくる。例えばパソコンの管理についても少し具体的にかみ
砕かないと、何をやっているのかわからない。最初はここからスタートして、大事なも
のをおさえてやっていく必要がある。

4) 学則改正(総合科学教育研究センター協議会の構成)について
資料に基づき説明を行い、了承された。

(2) 第2回協議会以降の学内情勢について

1) 入学者選抜の状況

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

(大学院への社会人の入学)

大学院の入試には社会人入試も含まれているのか。また、どれくらいいるのか。

社会人も含まれているが、応募者は非常に少ない。

私どもの大学は文系なので事情が違うのかも知れないが、社会人の方が遥かに多い。定
員30名の半分以上が社会人である。会社からの派遣や、公益という特殊なテーマを持
っているため県庁や市役所から勉強をしたいという方が非常にたくさん来ている。理系
でも会社の方で再教育させたいといったニーズはあると思うので、そういうところを掘
り起こすのはどうか。

今年度は例年と違ってたまたま入学者がいなかった。

リカレント教育という視点で募集すると社会人は増えると思う。私どものところは高等
学校の現役の先生が5名くらいおり、県外からも来ている。

県立高校の校長に話を伺ったところ、高校からも先生の再教育ということで、修士課程
に入れたいという希望はあるようである。過去に何名か入れたことがあると聞いている。
そういう方々が勉強しやすいような環境を作ることが大事。

開学当初は県の試験場などから来ていたが、だんだん減ってきている。

県にもメリットを作ってもらわないといけない。

高校の再編があるので、そういうことも高校の先生方が大学院にリカレント教育のよう
な形で入るチャンスではないか。積極的に教育庁でも何らかの支援なり方策を出してい
ただきたい。

私どものところは社会人向けのコースは徹底的に土曜・日曜・夜にやっている。

(学部学生の確保)

推薦A・Bに関して、教育委員会や学校に要望等があったら、率直に言ってもらいたい。

現在、理事3名と教育庁高校教育課長・義務教育課長とで懇談会を持ち、情報交換をし

ているのでこういう話題を出して行きたい。

少子化によって選択権が生徒や保護者に移っており、高等学校でも生徒の募集に難儀をしつつあり、大学はさらにその傾向が顕著になっていると思う。例えば各高等学校では表現力の育成などの観点から、課題研究の発表の機会が増えてきている。高校生レベルの発表会だが、中には光るものもある。その際に大学の先生が来て、君の研究いいなと言ってもらえれば権威がついて、そういう声が「あの先生のところで学んでみたい」ということに結びつくということがある。ダイレクトに生徒が発表する場に行って評価していただくとし、生徒の意欲も出て来るし、大学との関係も深まっていくのではないか。特に課題研究発表会では、農業関係の発表でも、中にはすごい子がいるなという思いをしたことが何回もある。

大学にコミットしてもらいたいという話は伺っているので、真摯に受け止めたい。

2) 就職内定状況

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

(県内就職)

就職は、県外と県内では比率はどの程度か。

3割が県内である。

(大学院への進学)

良くできる学生が東北大へ流れてしまうという悩みがある。そういう人材を作っているという意味では良いことかも知れないが。

これは世の中の趨勢であり、上に行きたいというのは当然なので、開拓するとしたらもう少し下のレベルというか、そういう学生を教育していくということではないか。

本学のできる学生を外へ出して、よそのできない学生を入れるというのも何となく。

そういうことではないと思う。社会全体のために必要な人材を作ることなので当然ではないか。

この間、本学出身者で、修士課程は東北大へ行き、博士課程はやはり県立大の方が良いと言って帰ってきた学生がいる。大きな有名大学ではマスの中に埋まってしまうが、本学では、教員一人当たりの学生数が7名しかいないということで少人数教育が可能である。施設にしてもこちらの方が良いと言って帰ってきたので、大変ありがたかった。

他大学の大学院に行くのは、ほとんど県外なのか。

秋田大学は非常にまれで1名か2名である。

大学院へ行くときに、2つのパターンがあり、一つは本当に研究を続けたい場合と、もう一つは最終学歴を書き換えたいという場合である。後者はもう対応できない。研究面であれば、かなりの部分を対応できるので、こちらの魅力を伝えることができる。

3) 特待生表彰

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

仕組みを作っていたら本当にありがたい。本県の奨学金や返納率を考えるとかなり経済的に苦しい家庭があり、借金している方もいる。ぜひ活かしていただきたい。

先日全県の校長会で説明をしたときにも大変ポジティブに受け取ってもらった。訪問した高校でも大変に感謝していただいている。

4) その他

理事長より高校訪問の状況について説明を行い、次の質疑が行われた。

(特待生の推薦)

特待生の校長推薦というのは良いと思う。私どももそれをやっており、2番目の成績だがこの子だったら大学へ行かせてやりたいといった、いろいろなファクターまでも高校側で加味してくれる。ダメだったらもう一度受けられるという形にしておいてあげれば、校長推薦で取るのは良いと思う。私どもの大学では、これから一般入試からも推薦を取る。今までは校長推薦ということでやってきた。

リスクもあるのだろうとは思いますが。成績が1番2番でなくとも、将来性があると思えば推薦してもらいたい。残念なことは、校長先生の在任期間が平均2年で、3年見ているというところに達しない。今約束して推薦してもらったら良いのだが、次の年に校長先生が交代したら困るという気がした。

進路指導の先生がきちんと見ておられるのではないか。

高等学校の中でオープンに公正に選抜しようとする、結局成績優先になって面白みがなくなってしまうので、その辺はぜひ何とかしてもらいたいと思っている。

校長推薦については経済界としても是非してもらいたいし、経済的な問題もさることながら、校長先生が見てこれだという人を推薦してくれた方が絶対効果がある。こういう革新的なことをやらなければいつまでも秋田はだめ。どんどんしてもらいたい。

高校の成績だけではない。後で伸びる子はいる。

そうやって来てくれた場合には、毎年の成績を校長先生に報告するとか、そういうことを続けて、なるべく継続性のある話にしたいと思っている。

(3) 今後の大学や法人のありかたについて

1) 前回の議論について

資料に基づき前回の議論の概要について説明を行い、次の質疑が行われた。

(県内企業からの求人)

前回、県内企業は事業計画予算を立てるのが遅いから求人募集が遅いという議論があった。これはそのとおりだと思う。秋田県は中小零細が90%以上なので、前もって来年度の予算計画を立てるという習慣がない。商工会議所としてはこれからそういうことをやるようにしたい。できるだけ早く募集をしなければ。

ぜひ期待したいと思う。それから、県内に常にニュースが伝わるように、メッセージがもっと出るように、今、大学のホームページの改訂を行っている。受験生にとっていかに魅力ある大学かということが伝わるようにということで、学生たちを集めて、どういう情報が欲しいのか、どういう形のホームページが歓迎されるのかということについて意見交換している。年明けに新しいバージョンが載るので、ぜひ覗いていただきたい。

(女子学生の確保)

工学部などでは、女子が非常に少ないと思う。山大工学部では、高等学校に行って、女子に理系に進んでもらうようなキャンペーンをやっている。もう少し東北できちんとしたところを出てもらって、理系の女子を増やしていかないと。定着率も女子は良い子が

地元の良いところに就職している。優秀な子を残すということを考えた方が良いと思う。現在、生物資源では女子は50%を超えている。システムは20%くらいだが工学系で20%というと、悪い方ではない。先だって県立の女子校を訪問して校長先生とお話したら、卒業生を理系に入れたいということで、一生懸命勧めているということをおっしゃっていた。そこの生徒たちが大学訪問に来て、帰ってから書いた感想文のコピーをいただいたのだが、非常にレスポンスは良い。

統計を取ると、子供たちが進路を決めるとき、お母さんの影響が大きい。理系に関心を持ったお母さんを増やすということが非常に大事だと思う。これから少子化の中で、女子に理系に入ってもらわないといけないということがあり、数の点からも必要である。女性は割と新しいことも好きだが、地に足のついた見方も得意ではないか。そういう事情をいろいろ考えると、女性を大事にする大学というのもいいのでは。

2) 優秀な教員を集めるには

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

スターティングメンバーの教員の交代期にさしかかっており、補充を見つけるのが難しいくらいの人数だが、いろいろな考え方を考えるチャンスでもあるので、この機会を逃さないように万全の構えでやりたい。

全く私どもも同じような状況であり、設立の時の人たちが辞める際に、下の人を昇任させるとしても年齢構成が滑らかではなく断層ができており、仕方がないので公募という形で教授を募集している。

若い人のなかには観念的に遠い秋田は嫌だと思っている人もいて、ちゃんと見てもらえれば良いのではないかという気がする。住めば都ではないが、そんなに大変なところではないと思う。

外国人は何人くらいいるか。

10人前後いる。ほとんど中国人である。

定年で出る方の後埋めは、公募をしている。大講座化をしたので、内部昇任も行った。内部からの昇任の場合には教育の上手な先生がおられると思う。教育型ということで、その辺を加味した形の昇任があっても良いのではないか。

論文業績で行くと下になるけど、学生にとって良いという人を選んでいる。

今年度の後期から先生方の授業評価を開始した。今後、授業を評価することを通じて、今いる先生方の教育の向上を期待していきたい。

授業評価というと学生の評価が一般的かと思うが、一人だけ特定の先生を学外からお願いし、授業評価専門ということで、シングルスタンダードで全部見てもらっている。その先生は他大学でも授業評価をやっておられたのだが、それに則った採点方法のほか、文章で良いところ悪いところを書いてもらっている。かなり厳しい意見が出ており、非常に参考になる。

3) 県立大学が行うべき研究・地域貢献について

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

松食虫について、由利本荘辺りが全部やられ、今能代辺りで何とか防ごうとしているが、心痛めている県民が多いと思う。県大の生物資源科学部の周りの松でもあるし、非常に

注目度が高いと思う。そういう意味で何とか守っていただきたい。

他の地域に比べると非常に青々としており、教授のお一方が非常に熱心にやってくれてあそこまで頑張っている。

もし人手が足りないようであれば、近隣の中学校、高校もあるが。

方法論は分かっている訳なので、あとは予算と人手だけが問題であり、心配している方々がたくさんおられるとすれば、もう少し市民運動的に盛り上がってくれると良いという気がする。

生物系の大学なので。もし生徒の方でできることがあれば人海戦術でも。

4) 県立大学の visibility を上げるには

資料に基づき説明を行い、次の質疑が行われた。

県立大学を拝見したが、まさに見えない大学である。市民が大学へ来て楽しめるとか、何か仕掛けを作らないとだめだと思う。私たちは、地域に開かれた大学というコンセプトでやっているのだから、一般市民のための公開講座は頻繁に開催しているし、講堂を市民が使えるようにしたりしている。どうしてあんなところに作られたのか。教員が街へ出て行かないとだめなのではないかと思う。難しいことをするというのではなく、大学が支援して、主として若い教員が地域へ出て行くことを推奨する雰囲気を作ってあげないと、なかなか出て行かない。例えば松食虫のテーマがあったが、学生を組織して外へ行かせるとか、積極的に教員側が動かないと、学生だけではなかなかアイデアも出ない。こうしたらどうかということを出してくれる若い教員を焚きつけると、見えるようになるのではないか。そういうところを新聞に取り上げてもらうとか。そういう何か見えるようなことをすると街の方々が寄ってきてくれるのではないか。

公開講座はやっているがそれほど頻繁ではない。サテライトを街の方に持った方が良いのかという気がする。国際教養大はサテライトを持っていて、語学教育に使っている。酒田街中キャンパスという学生にやらせているものがあり、中心商店街の空いたところに展示をさせている。教員は関わっているがあまり表に出ず、あくまでも学生がやる形にしている。中心商店街の活性化に役に立っているようで、学生が大勢いると、市民がすごく喜んでくれるようである。貸してくれるところはたくさんあるのではないか。

4 次回の開催について

次回の経営協議会については、3月下旬を目処に開催することとした。

以 上